



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アカデミック・アドバイジングの実践的検証 : 金沢大学におけるアドバイジング需要について
Author(s)	中野, 正俊; Nakano, Masatoshi; 井上, 咲希 他
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 29, 39-47
Issue Date	2022-03
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.29.39
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84348
Type	departmental bulletin paper
File Information	HighEdu_29_039.pdf



Examination of Academic Advising: The Needs for Advising in Kanazawa University

Masatoshi Nakano^{1)*} and Saki Inoue²⁾

1) Articulation Center for High School and University, Kanazawa University

2) Institute of Liberal Arts and Science, Kanazawa University

アカデミック・アドバイジングの実践的検証 —金沢大学におけるアドバイジング需要について—

中野 正俊^{1)**}, 井上 咲希²⁾

1) 金沢大学高大接続コア・センター

2) 金沢大学国際基幹教育院

Abstract — Academic advising is a means to help students to achieve their academic goals through advising sessions. The efficiency of academic advising is gradually being recognized in Japanese higher education in recent years. Kanazawa University launched academic advising specifically for students of the General Education Division in order to provide adequate support for the students who need to decide their field of study when they become sophomores. Based on the utilization data, this paper considers the mission of academic advising in the Japanese context. Originally, the main role of the academic advisor is to offer advice on students' class registration and increase the retention rate, but the need for advice on class registration is not high in Kanazawa University; rather, the desire for academic career consultation is greater. Moreover, students prefer simpler ways to communicate with advisors such as emails, texts, and question forms rather than directly seeing advisors. Finally, future implications are offered to promote academic advising in the Japanese context.

(Accepted on 17 December 2021)

1. アカデミック・アドバイジングとは

アカデミック・アドバイジングとは「学生とアドバイジング実践者との密接な関係の下に、学内や地域コミュニティの情報資源を最大限利用して、学生

が学習や職業あるいは個人的な目標達成を目指して行う支援」(Winston et al. Eds. 1984) と定義されており、アメリカでは専門職として認知されている多種多様なアカデミック・アドバイザーが学生の支援を行っている。アメリカを中心としたアカデミック・

*) Correspondence: Articulation Center for High School and University, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, Ishikawa 920-1192, Japan

E-mail: nakano.m@staff.kanazawa-u.ac.jp

***) 連絡先: 920-1192 金沢市角間町 金沢大学高大接続コア・センター

アドバイザーによる情報交換も盛んで、NACADA (National Academic Advising Association: 全国アカデミック・アドバイジング協会) による研究会が行われるなど、近年の発展は著しい。日本においても中央教育審議会の2012年8月答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(中央教育審議会 2012)以降、学生支援や能動的学修法が大きく注目されており、アカデミック・アドバイザー制度について「専任教員がアカデミック・アドバイザーとして学生一人一人を担当し、学生の成績(GPA)や履修状況等を考慮しながら、履修相談や学生指導を行う制度」と説明されている。また、この効果については「アカデミック・アドバイザーが入学時から卒業時まで継続的に指導する体制をとることで学生の学修指導に責任を持ち、また、きめ細やかな学生のサポートの実現が期待される」と説明がされている。アクティブ・ラーニング化に伴う学修環境の整備や学修支援に取り組む大学は増加の傾向にあり、各大学内での様々な取り組みにより一定の成果が見えているが、近年の学生の多様化に伴いアカデミック・アドバイジングの必要性は一層高まっている。

また、ユネスコでもアカデミック・アドバイジングについて明記しており、以下の8つの目的・機能が具体的に挙げられている(United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization 2002)。

- ① 学生が人生の目標と一致する教育計画を進展させることを助ける。
- ② 学生のアカデミックな進歩と学位要件について、的確な情報を提供する。
- ③ 学生がアカデミックなポリシーと手順について理解するのを助ける。
- ④ 学生がアカデミックに成功する能力を高めるため、キャンパスの資源にアクセスするのを助ける。
- ⑤ 学生が教育的な、また個人的な問題を克服するのを助ける。
- ⑥ 学生のアカデミックな到達や、アドバイジングによる適切な介入を進展させることを阻害するシステムや個人の状態を特定する。
- ⑦ 学生の教育に関わるニーズ、パフォーマンス、

アスピレーションや諸問題について有効なデータを検討、使用する。

- ⑧ 学生のニーズや要望に応じて、学生とコンタクトを取ることにより、リテンション率を高め、学生を大学につなぎとめる。

日本国内においては、アカデミック・アドバイジングの必要性が高まる一方でアカデミック・アドバイジングに関する専門職は少なく、各大学が独自の方法で教員アドバイザーや学生チューターによるアドバイジングを実施している。清水(2015)はアメリカにおけるアカデミック・アドバイジングの制度や、アメリカで発展した背景を含めその専門性や実践について明らかにしており、日本においてもアカデミック・アドバイジングは近年注目されつつある。アクティブ・ラーニング化によって学生の学び方が主体的・積極的となる中、大学での学修方法、学生生活に関する支援を大学に求める傾向が強くなっており、より充実した学生に対するサポートが要求されている(ベネッセ教育総合研究所 2016)。

2. 研究背景と研究目的

2.1 アカデミック・アドバイジングの導入

アメリカにおいてはアカデミック・アドバイジングの研究が進んでおり、日本への導入に向けての研究が進んできている。近年の入試改革に伴い、経過選択制の導入など初年次教育の変革によってアドバイジングの重要性は増してきている(アップクラフトほか 2007)。しかし、アメリカ社会の変化とともに発展を遂げてきたアドバイジング制度を、そのまま導入するだけでは成果は得られにくいと考えられ、日本の大学動向を考慮する必要があると言われている(清水 2015)。一方で、学生への学習に関する支援には共通性があり、多様化が進む日本においても、より多様な支援が必要となる。そのため、アメリカのアカデミック・アドバイジングを参考とした上で、日本の大学に適したアドバイジング制度を構築することは重要な課題である。

2.2 日本におけるアカデミック・アドバイジング

アメリカにおけるアカデミック・アドバイジングの歴史は古く、NACADAを始めとして研究活動や情報交換も盛んである。日本においては、アメリカと同様のアカデミック・アドバイザー制度を導入している大学は多くはないが、アメリカとは異なる様々な形でアドバイジングが行われており、特に初年次科目においては、授業担当者が学生のサポートを個別に行うことがあるものの、大学の制度としてアドバイジングを実施しているわけではない。近年では各大学において独自のアドバイザー制度を導入する様子が見られ、各大学で導入されているアドバイザー制度を大別すると、2種類のアドバイジング体制にわけることができる。

2.2.1 担任型

アカデミック・アドバイジングとして導入したものではないが、古くからあるものを制度化して学生支援を行っている大学は多い。大学によって「担任教員」「アドバイス教員」「アカデミック・アドバイザー」など、その呼び方は様々である。担任型においては、学生が所属する各専攻の教員が担当者となり学生の対応にあたっている場合が多い。その場合は専門に関する授業などで学生との接点も多く、年次が進むとゼミや研究室での指導教員として学生と関わる事もある。また、初年次科目の担当者となる場合もあり、初年次から学生が接する専攻の教員の代表的な存在となる。メリットとして専攻の専門知識が豊かであり、専門に関わる具体的な将来のビジョンを考えやすい点や、各専門分野の履修相談に対応しやすい点が挙げられる。一方で、専攻選択前や専門の講義の少ない初年次において学生との接点が少なくなりがちである点や、学生支援以外の業務が主となりやすく担当者による対応の違いが生まれやすくなっている。また、各教員に専門の研究分野があるため、自身の興味とは異なる研究分野の教員に対しては進路相談を躊躇してしまう学生もおり、専攻外の担当者による客観的な進路支援も求められている。

2.2.2 専門員型

学部・学科の教員が兼任している場合もあるが、相談員として教員を選出している場合や、専門の教職員が担当する例、学生チューターが担当する例がある。メリットとしてはアドバイジングのための知識を持ち、特定の分野に対する知識だけではなく幅広く情報を提供できることが挙げられる。学生チューターを雇用する際には研修を実施し一定の知識を持つよう工夫されていることが多い。一方で、普段接する機会がないために足を運びにくいという声もあり、利用者が少なくなりがちである。また、担当者側の学生個人に対する情報が足りず、学生の性格等を考慮した上でのアドバイジングが難しい事もある。

以上のようにそれぞれのタイプにメリット・デメリットが存在する。アドバイジングにおいて正解を求めることは困難ではあるが、様々なアドバイジング制度の長所・短所とアドバイジングの現状を理解した上で、日本の大学に適した体系的なアドバイジング体制を考える必要がある。

2.3 研究目的

本研究では、アカデミック・アドバイジングの実践者として、アドバイジングの利用状況や学生アンケートより分析・検証し、総合的なアドバイジングの課題を見出すことで、学生が求めるアカデミック・アドバイジングを明確にし、日本におけるアカデミック・アドバイジングの在り方を考察する。

3. 金沢大学のアカデミック・アドバイジング

金沢大学では2008(平成20)年度に従来の「学部・学科」制から、より幅広く柔軟な学びを目指して「学域・学類」制という組織に再編し、2018(平成30)年度より理系一括入試、文系一括入試を実施し、総合教育部で1年間を過ごした上で専門選択を行う経過選択制を導入した。この経過選択制において、進路未決定の学生が1年間を大学で過ごす中で自分の

将来や専攻を決定していくが、幅広い分野からの専攻選択となるため、ミスマッチなどの問題がこれまで以上に起こりうる。そこで、金沢大学ではこのような問題に備えてアカデミック・アドバイジングを導入し、文系（約60名）、理系（約80名）に対してそれぞれ1名の教員が専任のアカデミック・アドバイザーとして履修支援・進路支援を行い、学生の進路決定のサポートを行っている。学生は進路に悩む時には、アカデミック・アドバイザーからの進路選択のための各専攻の情報や説明を受けたり、一人ひとりに沿った履修計画を立てられるよう履修支援を受けることができる。

また、アカデミック・アドバイザー以外にも学生約20名につき1名の教員が担任教員として学修上や生活上の相談にあたり、アカデミック・アドバイザーと担任教員とが連携して学生のサポートを行っている（図1）。担任教員は5月、11月、2月の年3回の学生面談を必ず行う一方で、アカデミック・アドバイザーとの面談は学生の希望に応じて随時実施しており、予約した上での面談が可能であるが、学生の履修状況を見た上で学生が訪問しやすい時間帯に面談用の部屋を開放し、予約なしでも面談が可能となっている。

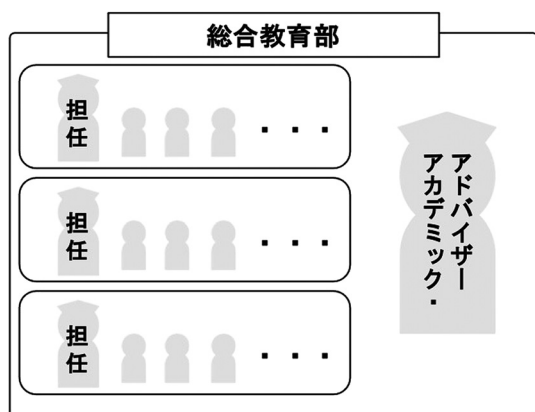


図1. 金沢大学のアカデミック・アドバイジング

4. アドバイジング利用状況と学生アンケート結果

4.1 利用状況と学生アンケート

2018年度、及び2019年度の総合教育部理系の学

生において、アカデミック・アドバイザーとの面談を実施した延べ件数を表1に示す。休学者を除くと、2018年度は77名、2019年度は76名の学生を対象としている。入学直後と進路選択直前の時期（2～3月）には多くの学生が面談を希望する一方で、それ以外の時期には面談を希望する学生は少なく、利用者が少ない点が課題である。

表1. アカデミック・アドバイザーとの面談件数

年度 (学生数)	2018年度 (77名)	2019年度 (76名)
4月	37件	25件
前期(5月～9月)	9件	8件
後期(10月～3月)	24件	18件

毎年2年次進級直後に、大学ポータルサイトを活用した学生へのアンケート調査を実施し、1年間のアドバイジングについて振り返りを行なった。図2「担任教員との面談の頻度」では、年3回の担任教員の面談頻度について、適切であるかを振り返った。多くの学生は教員との面談が必要であると回答しており、より多くの面談を希望する学生も一定数存在する。逆に面談を不要と考える学生は非常に少なく、教員との面談を通して、その必要性を学生が実感している事がわかる。

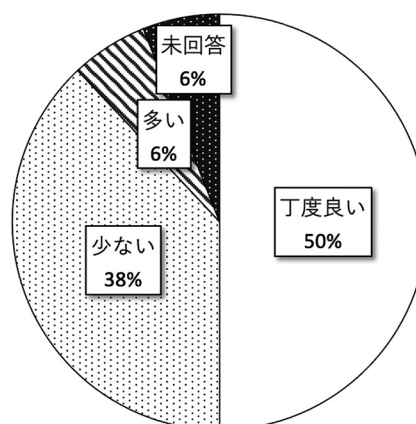


図2. 担任教員との面談頻度（回答数：32）

次に、学生が自身の専攻選択を決める際に何を参考としているのかを同様のアンケートの中で調査した。アンケートでは、複数選択可能な9項目の選択肢から、役立ったものを調べ、図3にアンケートの結果を示している。「担任／アドバイザーとの面談」

が役立ったと答える学生が突出して多く、9割以上の学生が進路決定の際に役立った項目としている。「友人・先輩への相談」を始めとした他の項目と比べて非常に多くの学生が進路決定に役立った項目としている。実際にアドバイジングを受けた学生にとっては、教員との面談が非常に参考となっており、一定数以上の面談が必要であるという結果を得ることができた。

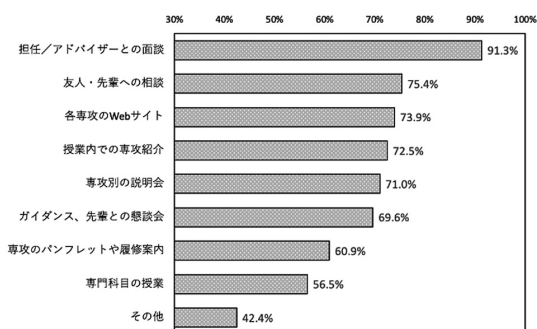


図3. 進路決定に何が役立ったか (回答数: 32)

これまでの学生のアドバイジング利用状況と学生アンケートから、実際にアドバイジングを受けた学生にとってアドバイジングは重要な位置付けとなっているが、アカデミック・アドバイザーとの面談件数は伸びていないことがわかる。一度アドバイジングを受けた学生は繰り返し面談を希望する場合もあり、面談をした学生のうち4割近くが複数回の面談を行なっている。そのため、最初の面談に向かうためのハードルを下げる事が重要である。そのため、いかに入学直後の段階で面談を行うよう誘導できるかが重要となり、初年次教育のカリキュラムの中でアカデミック・アドバイジングの重要性を説明し、アカデミック・アドバイザーとの面談を義務化することや、授業内でアカデミック・アドバイザーとの関わりを増やすなどの工夫が必要となってくる。アドバイジングを受ける学生との信頼関係が構築されていることで学生と本質的な話ができることとされており、この観点からも授業を始めとしたカリキュラム上でアカデミック・アドバイザーと学生との信頼関係を構築するための仕組み作りが必要となる。

4.2 アドバイジングの内容

アカデミック・アドバイザーとの面談をする際には、事前に相談内容を「履修、制度、進路、授業、その他」の5項目からの選択式で記述し提出している。2018年度、2019年度にアカデミック・アドバイザーとの面談の際に事前提出のあった相談内容(84件)の内訳を図4に示している。面談を行った学生のうちの半数が「進路について」の相談で、「専攻選択の悩み」「各専攻の特徴」「将来の進路」等が主な内容である。「履修について」の相談は約2割であり、「必修科目の確認」や、「履修システムの確認」が主な質問内容である。また、「制度について」の相談も約2割あり、「専攻決定の方法の確認」が主な質問内容である。これは新制度の学部であることが影響し、学生間での情報が少なかったことや、他専攻とは異なる制度であること、専攻選択への不安に起因すると考えられる。また「授業について」の相談が約1割となっているが、アカデミック・アドバイザーが担当する授業に関する質問ではなく、授業全般についての勉強方法や悩みに関する相談が主となっている。

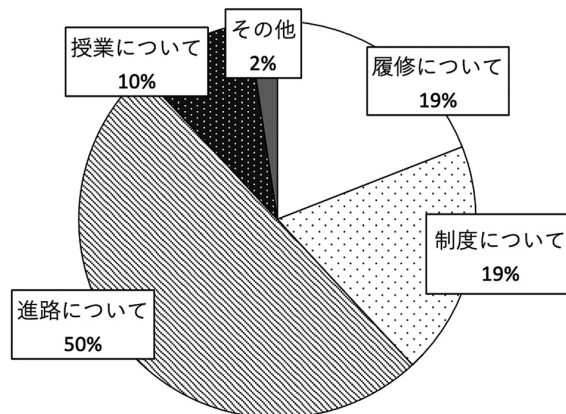


図4. アカデミック・アドバイザーとの面談内容

「進路について」の相談が非常に多く、実際に進路決定に役立った項目として「担任/アドバイザーとの面談」を挙げている学生が9割以上となっていることから、進路支援という点でアカデミック・アドバイジングが十分に機能していることがわかる。しかし、「履修について」の相談は多くはなく、相談があっても「履修の仕方・方法」といった制度面で

の質問が多い。これは大学のカリキュラムがある程度決まっており、専攻によっては週の多くの授業が必修の科目で埋まってしまう場合もあることに起因すると考えられる。

専門の科目においては、その多くが必修や選択必修となっており、選択科目となっている場合も選択肢が多数あるわけではなく、相談する必要性がないとされることが多い。また、教養科目についても、学生は「単位修得が容易か」「課題の量」といった教員よりも先輩をはじめとした学生目線での情報への要求が多く、教員への相談という需要は決して多くない。そのため、「アドバイザーと学生と一緒に履修について考える」という履修支援の要求は少ないというのが実情である。各年次によってカリキュラムが一部決まっている場合には、履修支援の要求は少ないことがわかる。

いての相談が多く、入学時には「履修登録の方法がわからない」などの履修制度についての相談や、「週に何科目程度の授業を履修すべきか」「多くの授業を履修すると大変ではないか」といった履修に対する不安による相談も多くあった。一方、前期の段階では進路についての相談は2割にとどまっており、入学から夏休みまでの期間では、大学の様々な制度を適切に把握するための手助けをすることがアカデミック・アドバイザーの重要な使命であると言える。

後期になると「進路について」の相談が急増し6割を超える割合となっている。前期の成績を振り返り、先輩の話を聞くなど自身でも情報収集を行った上で、自身の専攻選択と向き合うようになることがわかる。また、後期になると「授業について」の相談は少なくなり、大学に慣れたことで授業担当の教員に直接質問する等自身で解決するようになっていることがわかる。

以上のように、学生が求めているアカデミック・アドバイジングは「履修支援」以上に「進路支援」であることが相談内容から考察することができ、「履修支援」については履修制度に関する相談が多く、どの授業を選択するかは比較的少ないことがわかった。一方、時期によって求められる支援は変化し、入学から夏休みまでの期間では主に大学に慣れるための支援が必要となる。夏休み以降は進路に関する相談割合が非常に大きくなり、前期の制度面・生活面のサポートを経て、学生からは進路支援が求められるように変化していくことがわかる。この変化を理解した上で、後期のアドバイジングを実施することがアカデミック・アドバイザーには求められる。

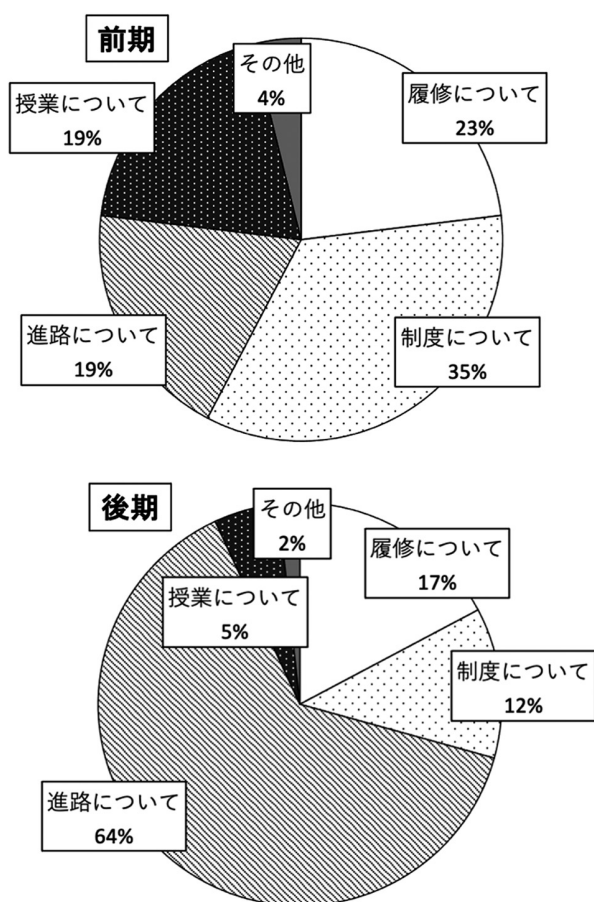


図5. セメスター毎の面談内容

また、図5ではセメスターによって面談内容がどのように変化するかを前期(26件)・後期(58件)に分けて比較を行った。前期では大学の制度面につ

5. 学生が求めるアカデミック・アドバイジング

5.1 アカデミック・アドバイザーの役割

金沢大学においてアカデミック・アドバイジングを導入するにあたり、「進路支援」と同時に「履修支援」についても重要であると考えられていた。しかし、学生が実際にアカデミック・アドバイザーに求

めるものとしては「進路支援」に関するものが多い。また、面談だけでは学生への支援としては不十分であり、面談の件数が決して多くはないことから学生相談だけがアカデミック・アドバイジングであるとは言い難い結果となっている。図3「進路決定に何が役立ったか」を見ると、面談以外にも進路決定の参考となった項目は多く、多くの項目で7割以上の学生が参考になった項目であると答えている。このことから、面談だけではなく進路の参考となる様々な企画・運営を担当し実施することもアカデミック・アドバイジングの一貫であると考えられることができるのではないだろうか。

また、アカデミック・アドバイザーに求められるその他の項目として、学内の各学生支援担当を始めとした様々な部署や、各専攻の教員・学生との連絡は重要な役割となる。学生が進路支援の参考とするための各種企画・運営と重なる部分もあるが、専門分野の教員に専攻選択のための質問や、専攻分野の上級生に直接質問をする事も進路選択のための参考となっている。進路支援のための企画・運営だけでなく、各専攻分野の教員・学生との連絡を手助けする事も学生から求められるアカデミック・アドバイジングであると考えられる。

このように学生から求められるアカデミック・アドバイジングは面談を行ってサポートするだけでなく、様々な進路支援全般が重要であると考えられることができる。これは主に専攻決定を行う必要のある初年次、大学・専攻によっては2年次までの学生にとって必要となる。図6のように、学年によって必要となる支援は変化し、専門分野の授業が増えるに従って、より専門的知識を有した学術的支援や、卒業が近くなると就職・進学といったキャリア支援が必要となる。学年が進み各専攻の教員と接する機会が増えると、徐々に専攻の教員によるサポートが重要となり、ゼミや研究室へ配属されるようになる頃には指導教員が最も適切なアドバイザーであると言える。そのため、アカデミック・アドバイジングは初年次を中心とした進路支援において特に重要となるといえる。

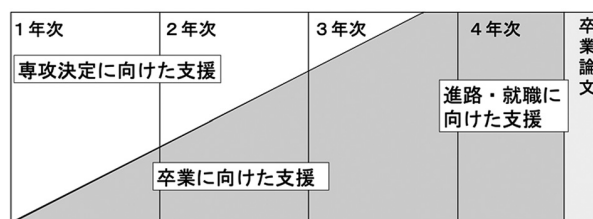


図6. 学年による必要な支援の変化

5.2 多様なアドバイジング

学生から求められる相談方法としては、面談が最も多くなっているが、学生によっては面談よりメールで質問を送るだけという学生もいる。夏休みなどの長期休暇はメールによる相談が増えるが、この時期の相談件数は決して多くはない。また、授業などで会う機会があるとその際に口頭での簡単な質問をすることも多く、学生自身で自分に合った相談方法を選択している。面談の件数は伸びていないものの、メールで質問する学生、アドバイザーと会う際に短時間で質問をする学生も多い。表2には学生から受けた質問方法別の質問件数を示している。なお、2020年度については、メールによる質問が非常に多く、面談件数も多少あるが、コロナ禍の影響により面談はほぼ実施しておらず参考としての記載である。面談以外での質問も多くあるため、2020年度にはオンライン化に伴いSNSを用いた匿名で質問可能な質問箱を設けて気軽に質問ができる環境を用意した。インターネット上で匿名で質問したものに、アカデミック・アドバイザーが回答し、回答は誰でも閲覧できるものとしたところ、非常に多くの質問を受け、有意義なサポートが達成された。

表2. 学生からの相談方法

年度 (学生数)	2018年度 (77名)	2019年度 (76名)	2020年度 (70名)
面談	70件	51件	8件
メール	15件	10件	56件
その他(簡単な質問等)	52件	29件	13件
質問箱	—	—	150件

この結果から、面談までは必要でないものの、質問をしたいという学生は非常に多いということがわかる。学生支援において利用者が伸びないという課題は多く報告されており、日本の学生の傾向として

自ら相談に足を運ぶ学生は少なく他人に相談することは避ける傾向にある。しかし、相談・質問をしたいという願望は抱えており、相談・質問しやすい環境を用意することもアカデミック・アドバイザーには求められている。過去2年を比較すると、2018年度に比べて2019年度には学生からの相談が一律減っており、要因の一つとして授業内で接する機会が減っていたことが考えられる。学生と良好な関係を築くことで学生からは相談しやすい相手とみられるようになるため、特に入学間もない時期には可能な限り学生と接し交流する時間を作ることが重要である。

5.3 学修支援との連携

金沢大学総合教育部では、理系学生を対象に数学・物理・化学の担当教員によるリメディアル授業を行っており、週に2回これらの講義のある曜日に合わせて実施している。内容は担当教員に一任されているが、学生が自由に自習したり、各担当教員が授業に関する質問を受ける等、学生の自主性を重んじた時間となっている。理系学生にとっては、アドバイザーや担任教員以上に数学・物理・化学の理系科目の教員とは1年間の授業を通して接する時間が長い。授業の内容も理系学生にとっては他の授業以上に予習・復習の時間を割く内容であるため、このリメディアル授業への参加者は多い。正課外の授業であるため参加者は積極性の高い学生が多い事から、必ずしも相関関係があるとは言えないが、図7に示すように、リメディアル授業に参加した経験のある学生はアカデミック・アドバイザーと面談を実施している割合が非常に多くなっている。

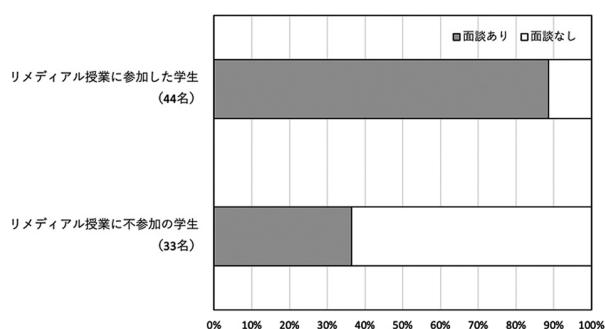


図7. リメディアル授業参加者の面談割合

この結果を受け、アカデミック・アドバイジングを実施する部屋の近くの講義室でリメディアル授業を行い、リメディアル授業を行う時間帯にアカデミック・アドバイザーが滞在する事で、学生が双方方向に行き来する環境を整えた。また、担当する教員同士による情報交換の頻度も増えたことで、より学生に対する支援環境が整ったといえる。リメディアル担当者は各科目の授業内やリメディアル授業の中で、アカデミック・アドバイザーとの面談を推奨しており、困った事があつたらアカデミック・アドバイザーへ相談するよう促している。学修支援であるリメディアル授業とアカデミック・アドバイジングとが適切に連携する事が、双方にとって有意義なものとなった好例であるといえるだろう。このように、アカデミック・アドバイジングと学修支援との連携は非常に有用であり、授業担当者が推奨することでアカデミック・アドバイザーとの面談へ訪れるようになる。そのため、初年次学生が履修する授業担当教員との関係性は重要である。アカデミック・アドバイザーには各授業担当教員、そして学修支援の担当者との連絡や情報交換も求められる。

6. まとめ

ここまで、金沢大学で取り組んでいるアカデミック・アドバイジングの実践による報告をした。利用状況と学生アンケートから、面談の件数は伸びないものの、実際に面談を受けた学生は面談の重要性を実感しており、教員との面談が最も進路選択の参考となっていることがわかった。そして、各年次ごとにあらかじめカリキュラムがある程度組まれている場合においては、アドバイザーと一緒に履修を考えると履修支援の重要性は低く、学生には履修支援以上に進路支援が求められているという結果が得られた。一方で、進路支援としてのアカデミック・アドバイジングは非常に有効であり、複数の教員に進路を相談できるような進路支援が学生に求められていることがわかった。対象が金沢大学総合教育部であることが、その傾向をより強める結果となっているとも言えるが、経過選択により専攻決定を行う際には重要な結果である。

また、アカデミック・アドバイザーによる進路支援において、学生の相談を受けることだけが求められる支援ではない。進路選択のきっかけとなる様々な企画の発案・実施もアカデミック・アドバイザーの重要な役割であり、専攻分野の教員や学生との仲介もまた、進路支援の一部である。特に初年次の学生にとっては、大学内にどのような制度・組織があるのか、どのように各専攻の教員や各部局へ連絡すべきかの理解が不十分である。履修制度を始めとした大学の制度に関する知識も不足する中、学生が大学の様々な支援を受け学生生活を豊かにする手助けをすることも、アカデミック・アドバイザーの役割の一つと言える。

学生は面談を必要と感じてはいるものの積極的に面談を希望する学生は少ない傾向にあるため、学生が気軽に相談・質問ができる環境を用意することもアカデミック・アドバイザーの重要な役割である。初年次では履修支援以上に進路支援が求められていることから、初年次教育の中でカリキュラムの一部にアドバイジングを組み込むことで、履修制度をはじめとした大学の制度の理解を深めるとともに、アカデミック・アドバイザーと接する機会を授業の中で設けることが必要となってくるのではないだろうか。

7. 今後の課題

アカデミック・アドバイザーとしての実践を基に、学生の意見を聞きながら学生がどのような支援を求めているのかを考察してきた。しかし、金沢大学の中でも総合教育部という一部の学生のみを対象としており、対象者の数は決して多いとはいえ、学生の属性としてもより多様性が必要である。より多くの学生を対象としたアドバイジングの実施が可能となり、多様な学生の意見を聞くことができれば、より組織的なアドバイジング体制の構築を目指すことができるだろう。また、アカデミック・アドバイジングに携わる専門の教員の数も多くない。これは、実践ベースでのアドバイザーの研究が軽視される傾向にあることが少なからず影響しているといえるだ

ろう。また、大学の予算体制を考慮すると、専門職としての雇用を期待することは難しく、少人数であるがゆえに達成できていない研修体制の充実化も重要な課題である。しかし、近年の発展に伴い事例報告や実践研究が徐々に増えつつあり（清水ほか2019）、今後の更なる発展が期待される。多くの大学の事例報告を基に、より幅広い日本の大学に適した日本独自のアカデミック・アドバイジング体制を考案することが今後の課題となる。

文献

- アップクラフト, M・リー, ジョン・N・ガードナー, ベツィ・O・ベアフット(山田礼子監訳)(2007), 『初年次教育ハンドブック—学生を「成功」に導くために—』, 丸善出版 (M. Lee Upcraft, John N. Gardner, Betsy O. Barefoot, (2004), *Challenging and Supporting the First-Year Student -A Handbook for Improving the First Year of College-*, Jossey-Bass.)
- 清水栄子 (2015), 『アカデミック・アドバイジング—その専門性と実践—』, 東信堂
- 清水栄子, 山崎めぐみ, 御厨まり子, 島田敬久(2019), 「アカデミック・アドバイジング実践者に対する能力開発の観点から」, 『大学教育学会誌』40 (2), 103-106
- 中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ— (答申)」
- ベネッセ教育総合研究所 (2016), 「大学生の学習・生活実態調査報告書」
- United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (2002) *The role of student affairs and services in higher education A practical manual for developing, implementing and assessing student affairs programmes and services*, 25-26.
- Winston, R.B., Ender, S.C., Miller, T.K. and Grites, T.J. (Eds.), (1984). *Developmental Academic Advising: Addressing Students' Education, Career and Personal Needs*, Jossey-Bass.